芸術は長い間、社会的・文化的な変革を推進する力として認識されてきましたが、ジェンダーに関する問題は依然として存在し続けています。また、ジェンダーの視点から芸術を分析することは、社会の多様性と包摂を理解する上で非常に重要です。シンポジウムでは、歴史的および現代的な芸術作品や芸術を支えてきた人々・仕組みを対象に、ジェンダーの視点からそれらがどのように表現され、影響を与えてきたかを考察します。幅広い事例を参照しながら、芸術とジェンダーの交差点における現代的な課題と可能性を考察し、また相互に知識と経験を共有する場を生み出す機会となることを願います。

This symposium aims to shed light on the "past" and "future" of women's perspectives and activities, which have often been overlooked in the writing of History, while exploring diverse viewpoints and approaches related to art and gender. Art has long been recognized as a force for driving social and cultural transformation, yet issues concerning gender remain persistent. Analyzing art through the lens of gender is vital for understanding societal diversity and inclusion. The symposium will examine how historical and contemporary artworks, as well as the people and systems that have supported art, have been expressed and influenced from a gender perspective. Drawing on a wide range of examples, we aim to explore contemporary challenges and possibilities at the intersection of art and gender. Furthermore, we hope this event will create an opportunity for participants to hare knowledge and experiences with one anothe.

定員100名 事前申込制(先着順) 参加無料 QRコードまたは下記のURLからお申込ください。

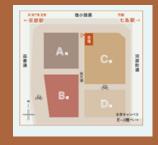
Capacity: 100 participants Pre-registration required (first-come, first-served) Free participation Please register using the QR code or the following URL. https://forms.gle/DeFcP656dehopSzM8



京都市立芸術大学講義室1 C棟1階

- ▶ JR・地下鉄「京都駅」駅前広場から徒歩約6分
- ▶ 近鉄「京都駅」から徒歩約10分
- ▶ 京阪電車「七条駅」1番出口から徒歩約10分
- ▶ 市バス「塩小路高倉・京都市立芸術大学前」下車すぐ

京都市立芸術大学芸術資料館 〒600-8601 京都市下京区下之町57-1 TEL.075-585-2008 FAX.075-585-2018 http://libmuse.kcua.ac.jp/muse/



芸術とジェンダー 多様性と包摂の視点から Art and Gender: Perspectives on Diversity and Inclusion

国際シンポジウム INTERNATIONAL SYMPOSIUM

場所:京都市立芸術大学 C棟講義室1

言語:日本語、英語(逐次通訳または資料配布あり)

主催:京都市立芸術大学芸術資料館

協力:アダム・ミツキェヴィチ・インスティテュート

後援:ポーランド広報文化センター、日本ポーランド協会関西センター

フォーラム・ポーランド

※会場内誘導や座席などについて、特別な配慮を必要とされる方は、5月10日までに、

京都市立芸術大学芸術資料館までご相談ください。 muse@kcua.ac.jp

Venue: Kyoto City University of Arts, Building C, Lecture Room 1

 $Languages: \ Japanese \ and \ English \ (consecutive \ interpretation \ or \ distributed$

materials available)

Organizer: University Art Museum, Kyoto City University of Arts

Support: Adam Mickiewicz Institute, Polish Institute in Tokyo, Japan-Poland

Association Kansai Center, Forum Poland

*If you require special arrangements for guidance or seating, please contact us (muse@kcua.ac.jp) by May 10.

京都市立芸術大学芸術資料館 芸術資料館web













プログラム PROGRAM

5月17日 (土) 13:00 - 17:40

13:00-13:10 ご挨拶

13:10-14:30 基調講演 1 小勝禮子「戦前〜戦後の日本の女性画家をめぐる社会環境、教育、

14:40-16:10 基調講演2 マルタ・スモリンスカ「マグダレナ・アバカノヴィチの『アバカン』 -物質の触感と触覚の感覚」

16:20-17:00 発表 1 パヴェウ・パフチャレク「水玉を超えて:美術史における草間彌生の 存在、不在、そして静かなる流用」

17:00-17:40 発表 2 加須屋明子「マリア・スタングレト=カントルの位置づけと重要性」

5月18日(日)10:30-17:40

10:30-11:10 発表 3 牧田久美「上野リチの『ファンタジー』と多様な個の尊重」

11:20-12:00 発表 4 深谷訓子「ネーデルラント総督パルマのマルガレータと芸術保護」

13:00-13:30 「herstories-女性の視点でたどる美術史」展鑑賞

13:30-14:10 発表 5 中村翠「彼の/彼女の物語:小説『オーランドー』(1928) から映画 『オルランド』(1992)へ」

14:10-14:50 発表 6 赤松玉女「女性が女性を描くこと一京都市立芸大で紡いだ私のものがたり」

15:00-16:30 基調講演3 アンナ・ボロヴィエツ「マグダレナ・アバカノヴィチのポズナンの

タペストリースタジオー自由と革命の空間」(※オンライン)

16:30-17:30 全体討論・質疑

17:30 17:40 おわりに

May 17 (Saturday), 13,00 - 17:40

13:00–13:10: Opening Address

13:10-14;30; Keynote Lecture 1 - KOKATSU Reiko, "Women Artists in Pre-War and Post-War Japan: Their Social Environment, Education, and Evaluation"

14/40/16/10: Keypote Lecture 2 – Marta SMOLIŃSKA"The 'Abakans' by Magdalena

ABAKANOWICZ: tactility of matter and sense of touch"

16:20–17:00: Presentation 1 – Paweł PACHCIAREK "Beyond the Dots: KUSAMA Yayoi's

Presence, Absence, and Silent Appropriation in Art History"

17:09 17:40: Presentation 2 – KASUYA Akiko "The Position and Significance of Maria Stangret-Kantor"

May 18 (Sunday) 10:30-17:40

10:30-11:10: Presentation 3- MAKHTA Hisami "Felice [Lizzi] RIX-UENO's Fantasy

and the Respect for Diverse Individuals"

11:20–12:00: Presentation A. FUKAYA Michiko "Margaret of Parma's Art Patronage as

Regent of the Netherlands"

13:00–13:30: Viewing of the Exhibition herstories Tracing Art History from Female

13:30-14:10: Rresentation 5 NAKAMURA Midor His/Her, Story: from the novel Orlando (1928) to the film Orlando (1992)"

14:10-14:50: Presentation 6 - ARAMAT SU Tamame "A Woman Drawing Women:

My/story at Kyoto City University of the Arts"

15:00–16:30: Keynote Lecture 3 – Anna BOROWIE¢ "Magdalena Abakanowicz's Tapestry. Studio in Poznań - a space of freedom and revolution." (*Online)

16:30=17:30: General Discussion & O&A

17:30-17:40. Closing Remarks

略歴 BIOGRAPHY

赤松玉女|あかまつ・たまめ 1959年兵庫県尼崎市生まれ。1984年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻(油 1959年兵庫県尼崎市生まれ。1984年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻(油 1903年大陸県元崎市出まれ。1904年末46市以上が、大人子供実利的の内部をデーマに、海豚、水彩、フレスコ技法など、面材や技法を組み合わせた絵画表現を研究、イタリアの創作活動などを経て、1993年から京都市立芸術大学美術学部美術科教員(油画)。1990年代には3人のアーティストのユニットでの活動や、2010年代には7番目のある人々や家族、支援する人々と一緒にアートを通した交流やサポートの実践を行った。2019年4月から2025年3月まで京都市立芸術大学学長。現

アンフ・ホロウイエン
ポイナン国立美術館、2019年、テリーの学芸員。博士 (人文科学)。美術史家、文学研究者。
2014年、一2017年、ヴロンワフ現代美術館で准教授として勤務。マグダレナ・アバカノヴィチ芸術
大学 (ボスナン) のコレクション部門の責任者をことめたこともあり、「ボスナンの芸術」と難し
た空間造形リポジトリプロジェクトのキュレーターとして、ポズナン市内に設置された彫刻や彫
刻作品のカタログ作成にも関わる、批評的および理論的なテキストの著者であり、「オブジェクト
空間」(ボスナン国立美術館、2019年)、「空間の形態:1960年代および1970年代のボスナンの
野外彫刻」(ボスナン国立美術館、2019年)、「マグダレナ・アバカノヴィチ:私たちは繊維構造
不ある。(ボイナ・)四本美術館、2019年)、「マグダレナ・アバカノヴィチ:私たちは繊維構造

深合部子 「ふかや・みちご 1974年栃末月生まれ。京都大学大学院博士後期課程・美学美術史学事修(2005年に博士(文学) の学位取得)。2001~2003年、オランダ、ユトレヒト大学留学。尾道市立大学芸術文化学部准教 授を経て、2013年、京都市立芸術大学美術学部に着任。専門は16、17世紀のネーデルラント美 術、ヨーロッパ近世美術の南北交流など。著書に『ローマの慈愛 「 年モンとベロー」の図像表 現」(京都大学学術出版会、2012年)、共編著『カーレル・ファン・マンデル「北方画家列伝」注 解』(中央公論美術出版、2014年)など。近番論文に「Depictions of Dutch Ships in Dutch and

1905年大洋県宗土まれ。京都大学大学所に丁俊明雄任事以信頼附近子「夫学夫物工学等外」。マイ エロン大学(クラクフ、ボーランド)哲学研究所美学研究室等。国立国際条轄衛建士任学芸員を 経て、2018年より京都市立芸術大学美術学部教員(総合芸術学)。博士(文学)。専門は近・現代 美術、美学、まな展覧会企画は「苦梅と選典」、1999年、「家の劇場一カントルへのオマーシュ」 2015年、「セレブレーション:日本ボーランド現代美術展」2019年など。2011年-2020年龍野ア ートプロジェクト芸術監督。2022年よりたつのアート実行委員会代表。著書「現代美術の場とし でのボーランド・カントルがらの健康と変容」(例元社、2021年)、ボーランドの前衛美術』(創 元社、2014年)、編著書『芸術と社会』(中央公論美術出版社、2024年)など。

小物機子にかつ・れい。 1955年埼玉県生まれ、近郊代美術史、ジェンダー論、実践女子大学、京都芸術大学非常勤講師。 元・栃木県立美術館学芸課長。企画開催した主な展覧会に、「奔る女たち 女性画家の戦前・戦後」 展 (2001年)、「前衛の女性1950—1975」展 (2005年)以上、栃木県立美術館、「アジアをつなぐ - 境界を生きる女たち1984—2012」展 (福岡アジア美術館はか、2012—1354)はか、共著に ・ 清川種・小勝種子「記憶の網目をたぐる一アートとジェンダーをめぐる対話』(彩樹辻、2007年) ほか、2023年「さいたま国際芸術家2023」市民プロジェクトとして「Women's Lives 女たちは ときている一病い、老い、死、そして再生」膜のキュレーションを担当。 https://womenslives.mystrikingly.com/ アジア女性アーティストのウェブサイトを管理・運営

京都市立芸術大学芸術資源研究センター客員研究員。博士(美術)。1972年からテキスタイルテ ザイン牧田久美主宰。財団法人日本繊維意匠センター第15回、第16回繊維デザインコンクール、 ワイングロン失主学。例如広人日本職権息にセンプー邦15回、非10回職権下サインユグール、 銀費、金費、その他受費・飯原開催等多数。2014年京都市立芸術大学美術研究科博士学位取得。 同大学美術研究科博士(後期) 課程人学。2018年京都市立芸術大学美術研究科博士学位取得。 2021年『キモノ図案からブリントデザインへ「GHQの機構産業振興政策―』を思文閣より出版 (単著、全368頁)。2022年度DNア女任振興財団グラフィック文化に関する学術研究助成に「教育 者としての上野リッチー戦後デザインへの影響―」が採択され2023年より運用開始(~2024年12 日

2006年ジュネーヴ大学にてDEA取得、2012年パリ第三大学ソルボンヌ・ヌーヴェルにて、博士号 取得。2013年〜2015年名古屋商科大学で教鞭をとったのち、2015年から京都市立芸術大学に着 任。フランス自然主義文学を専門とし、近年はアダプテーション研究にも関心を持つ。主な研究 葉鏡としては、。 Destin des personnages secondaires du roman au théâtre : L' exemple de la reine Pomaré dans Nana » (Lire Zola au XXIe siècle, Classique Garnier, 2018), 「自然主義小説 のアダプテーション――舞台、そして映画へ」(『レアリスム再考:諸芸術における「現実」概念の交叉と横断』松井裕美編、三元社、2023年)などがある。

プ学博士 (大阪大学)。キュレーター、美術評論家、時にパフォーマー。アダム・ミツキェヴィチ 大学 (ボズナン) 日本学専攻修士課程修了 (2012年)。 2021—2023年、日本学新貨庫会の外国、特別研究員、多摩美術大学制研究員を経て、2025年 より早福田大学高等研究所講師。 草間頭生研究、比較文学、美学、美術史の現代的問題に焦点を 当て、社会関連の型を指示動や、フェミニスム・タイテ・スタティーズなどを研究。2017年より フダム・ミツキュヴィチ・インスティテュート日本担当。主な著書「中欧・東原の文化事典」丸 ラ地名、2021年、シンピャーダン

マグダレナ・アバカノヴィチ芸術大学(ポズナン)教授。芸術学、キュレーション戦略、美術史を教える。キュレーター、美術評論家、ノマド、越境者。ボーランドAICA(国際美術評論家連盟)メンバー。2003年、ポズナンで博士号取得。同年から2014年まで、ニコラウス・コベルニクス大学(トルン)准教授。2013年に教授資格取得。2014年ミュンヘン大学(LMU)フェロー。2015年ベルリンのアルブ財団、2015年と2011年のAAD奨学金を受け、ミュンヘン大学および自由大学で研究に従事。20世紀後半の非見象性語、非志が上げ、ボーダーアート、トランスメディア性、触覚性を研究対象とする。主な著書:『Re-Orientation. Contexts of Contemporary Art in Turkey and on the Road』(ブルジュ・ドグラマチとの共編、Kadmos、ベルリン、2017年)、『Hapty:cnock poservana. Zmyst dotyku w sztuce polskiej drugiej polyowy XX i początku XXI wieku [拡張された触覚 – 20世紀後半から21世紀初頭のポーランド美術における触覚]』(クラクフ、2020年)など。